



Title	夫婦関係認知における評定項目の獲得困難性と平均点以上効果の関連
Author(s)	藪垣, 将
Citation	対人社会心理学研究. 2013, 13, p. 41-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25839
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

夫婦関係認知における評定項目の獲得困難性と平均点以上効果の関連¹⁾

藪垣 将(東京大学大学院教育学研究科)

自己の能力や特性に対する評定における平均点以上効果は、その生起が評定項目の獲得困難性に大きく依存しているとする先行研究に基づいて、本研究では夫婦関係認知における平均点以上効果の生起に評定項目の獲得困難性が影響しているかどうかを検討した。予備調査として、夫婦関係認知項目が収集され、夫婦関係を捉える肯定的・否定的側面が明らかとなった。本調査では、夫婦関係認知項目と評定項目の獲得困難性の関連が検討され、極めて強い相関関係が示された。このことから、平均点以上効果は夫婦関係認知についても生起するロバストな現象であること、平均点以上効果に評定項目の獲得困難性が大きく影響することが示された。

キーワード: ポジティブ・イリュージョン、平均点以上効果、夫婦関係、中年期、獲得困難性

問題と目的

平均点以上効果と評定項目の獲得困難性

平均的な他者との比較において、自身のさまざまな能力や特性を「平均よりも上である」と捉えることは、平均点以上効果(e.g., Alicke, Klotz, Breitenbecher, Yurak, & Vredenburg, 1995)と呼ばれる。先行研究においては国内外における多くの研究者がポジティブ・イリュージョンの指標として平均点以上効果を扱っており(e.g., Cohen & Fowers, 2004; 外山・桜井, 2000)、平均点以上効果は信頼性と妥当性が認められたポジティブ・イリュージョンの測定方法の一つとして位置づけられている。

平均点以上効果を生起させる要因の一つとして、評定項目の容易さ及び困難さが指摘されている(e.g., Kruger, 1999; 工藤, 2004)。評定項目の獲得困難性²⁾とは、「その項目の能力や特性を獲得するのはどの程度困難であるか」ということを意味する。例えば、「マウスを使う」「車の運転」などは容易な事柄であり、これらの能力に関する自身の能力を平均的な他者と比較するように求めると平均点以上効果がみられた一方で、「チェス」や「コンピューターのプログラミング」といった困難な事柄については平均点以下効果が見られた(Kruger, 1999)。さらに、工藤(2004)は、評定対象を能力ではなく特性とし、また肯定的な側面だけでなく否定的な側面についても取り上げて、同様の結果が見られることを確認した。これらの研究は、能力や性格特性などの自己評定における平均点以上効果を検討したものであった。

それでは、平均点以上効果に対する評定項目の獲得困難性の影響は、どの程度ロバストな効果なのだろうか。Klar & Giladi(1997)は、自身が所属している集団のうち、見知らぬ他者 1 名について集団の平均と比較させても平均点以上効果が生じることを示し、

平均点以上効果が平均との比較対象となる人物が自分以外の者である場合にも生じる現象だということを示した。また、外山(2002)は恋愛関係にある大学生を対象に調査研究を行い、恋人認知、恋愛関係認知において平均点以上効果が生起することを示した。さらに、Endo, Heine, & Lehman(2000)は、日本人、アジア系カナダ人、ヨーロッパ系カナダ人の夫婦を対象に調査を行い、それぞれの文化圏を超えて、同程度の強さで夫婦関係認知における平均点以上効果がみられることを示した。このように、自己に対する評定のみならず、他者に対する評定においても、他者との関係に対する評定においても、平均点以上効果がみられることは先行研究によって示されている。しかし、これらの他者評定や関係評定における平均点以上効果に対し、評定項目の獲得困難性がどのように影響を及ぼしているのかについては、これまで明らかにされていない。

平均点以上効果に評定項目の獲得困難性が影響を及ぼすメカニズムについて、Kruger(1999)は、容易な事柄の評定においては、他者にとってもそれが容易であるということを考慮出来ないために平均点以上効果が生起すると指摘している。また工藤(2004)は同様の指摘に加え、人々の「平均」に対する知識が乏しい可能性を指摘している。これらをまとめると、ある特性や能力などの評定の際に、「平均」を正確に考慮出来ないことによって平均点以上効果が生起していると言える。「関係」のように間主観的な概念の特性に対する評定においては、個人の平均に対する知識が必要であることに加えて、その関係を構成する個人の間の相互作用も考慮される必要があるために、個人の能力や特性を対象とした評定の際に「平均」を想定することと比して、関係の特性を対象とした評定の際に「平均」を正確に考慮することは、同等もしくはそ

れ以上に困難となると考えられる。これらのことから、関係認知においても、評定項目における平均点以上効果に評定項目の獲得困難性が影響を及ぼしていると予測される。

中年期の夫婦関係認知

さて、本研究は中年期の夫婦関係について取り上げる。中年期の定義の方法は様々あるが、本研究では石川(1997)を参考に、40 歳から 65 歳までの者を中年期と定義した。中年期夫婦は、婚姻関係期間が充分にながいと考えられる。つまり、夫婦関係認知はある程度の安定性を有していると考えられることから、中年期の夫婦関係に焦点を当てることは関係認知得点と評定項目の獲得困難性得点の関連を検討するという本研究の目的に適していると判断した。もし、関係認知得点と評定項目の獲得困難性得点のいずれかが容易に変動するならば、これら2変数の関連を検討することの重要性は低減するものと思われる。

夫婦関係認知における平均点以上効果は、2 つの方法から検討されてきた。「好ましい特性を表す形容詞」など夫婦関係に関する項目について自身の夫婦関係の評定を求める方法(e.g., Fowers, Fisiloglu, & Procacci, 2008)と、夫婦関係満足度などの構成概念を用いたもの(e.g., Fowers, Lyons, Montel, & Shaked, 2001)である。前者の方法は、研究者が用意した項目が夫婦関係認知において重要であるかどうかという点が不明である。また、後者の方法は、夫婦関係を包括的に評価しているが、どのような観点から夫婦関係を評価しているかが不明である。人々が自身の夫婦関係をどのような観点から捉えているのかということを詳細に検討するためには、研究者が項目を設定するのではなく、調査協力者から夫婦関係認知の項目を収集する必要がある。

以上をふまえ、本研究は平均点以上効果の生起における評定項目の獲得困難性の効果が(1)関係認知においても、(2)評定項目の感情価が肯定的な場合だけでなく否定的な場合においても認められるかどうかを検討することを目的とする。まず、予備調査を行い、夫婦関係認知の項目を収集する。次に、予備調査を通じて得られた項目について、肯定項目と否定項目それぞれについて、平均点以上効果と評定項目の獲得困難性の関連を検討する。

方法

予備調査

項目の収集 夫婦関係がどのような観点から捉えられているのかを明らかにするため、予備調査として夫婦関係認知項目の収集を行った。予備調査は、面接法

と質問紙法を組み合わせで実施した。面接調査は、夫婦関係にある女性 2 名(平均年齢 48 歳、平均婚姻関係年数 23 年 2 ヶ月)の協力を得て、夫婦関係認知の項目収集を行った。面接所要時間は約 60 分だった。質問紙は、研究者の知人を介して 41 組 82 名の夫婦に配布し、郵送による返送を求めたところ、25 組 50 名より回答を得た。有効回答数は 44 名で、有効回答率は 54%だった。調査協力者の平均年齢は、夫は 56.5 歳($SD = 7.21$)、妻は 53.5 歳($SD = 7.02$)だった。これら 2 種類の調査では、「御自身の夫婦関係を表現するような言葉を出来るだけ沢山挙げて下さい」などと教示し、夫婦関係を表現する言葉を収集した。回答に対しては、夫婦で相談しない旨を教示した。得られたデータは KJ 法を参考にして整理を行った。さらに、内容的妥当性や分かり易さなどについて検討を加え、最終的に肯定的な項目 58 個、否定的な項目 30 個の計 88 項目が作成された。

本調査

調査協力者と質問紙の構成 本研究は、工藤(2004)の研究枠組みに倣い、平均点以上効果と評定項目の獲得困難性の関連を検討した。まず、中年期の夫婦を対象に 80 組 160 名に質問紙を配布した。質問紙の配布方法は次の 2 つの方法を組み合わせた。1 つ目は、訪問留置郵送回収法を用いて、7 組の夫婦に質問紙への回答を求めた。2 つ目は、調査者の知人を介して、73 組の夫婦に質問紙を配布し、郵送での返送を求めた。質問紙には返信用封筒と説明書と同梱し、回答例を示した他、夫婦で相談せずに回答することなどを教示した。

予備調査から作成された 88 項目について、自身の夫婦関係がどの程度当てはまるかを尋ね、回答を求めた。教示は、予備調査で作成した夫婦関係認知項目それぞれに対して「あなたが思われる平均的な夫婦関係に比べて、あなた自身の夫婦関係にどの程度当てはまりますか？」と行い、「1.あてはまらない」から「5.あてはまる」までの 5 件法で評定を求めた(以降、関係認知得点とする)。理論的中央値である 3 は、「どちらともいえない」とした。さらに、同じ 88 項目について、自身の夫婦関係がその特性を獲得することはどの程度難しいかということについて尋ね、回答を求めた。教示は、肯定的な項目については「あなた自身の夫婦関係に関して、そうである事がどの程度容易か困難であるかをお答え下さい」と行った。否定的な項目については、「あなた自身の夫婦関係に関して、そうでは無い事がどの程度容易か困難であるかをお答え下さい」と行った。回答については、「1.非常に容易」から「7.非常に困難」までの 7 件法で評定を求めた(以

降、獲得困難性得点とする)。

結果

データの処理

46組92名より回答を得た。回収率は57.5%であった。有効回答は84名(52.5%)で、欠損値は平均値補完法を用いて補完した。

続いて、関係認知項目について、肯定項目・否定項目の評定方向をそろえるために、否定項目に対する評定を6から減じて逆転させた。さらに、各評定から3を減じることで、肯定項目については平均より自分に当てはまるという回答が正に、平均より自分に当てはまらないという回答が負になるように、否定項目については平均より自分に当

てはまるという回答が負に、平均より自分に当てはまらないという回答が正になるようにした。この手続きにより、肯定項目・否定項目のいずれにおいても、関係認知項目得点が正の値を取る場合は平均的な夫婦関係に比べ自身の夫婦関係を好ましく捉えており、負の値を取る場合は平均的な夫婦関係に比べ自身の夫婦関係を好ましく捉えていないということを意味する。

次に、各項目について、関係認知得点および獲得困難性得点の記述統計量を算出した。それぞれについて、以下のTable1 – Table3に示す。

最後に、予備調査で作成した88項目を対象に、関係認知得点と獲得困難性得点について相関分析を行った。

Table1 関係認知項目(肯定語)の記述統計($n=84$)

	<i>M</i> 99.9% <i>CI</i>				<i>M</i> 99.9% <i>CI</i>		
		下限	上限			下限	上限
性行為がある	-0.36	-0.97	0.24	許容しあっている*	0.74	0.33	1.16
趣味が同じである	-0.35	-0.90	0.19	思いやりがある*	0.80	0.30	1.29
同情がある	-0.35	-0.85	0.14	会話がある*	0.80	0.26	1.34
性格が一致している	-0.31	-0.78	0.16	愚痴を言える*	0.81	0.29	1.33
行動を共にしている	0.14	-0.42	0.69	育んできたものである*	0.81	0.36	1.26
謙虚である	0.19	-0.28	0.66	信頼しあっている*	0.82	0.34	1.31
高めあっている	0.23	-0.18	0.64	きずながある*	0.85	0.36	1.34
似たもの同士である	0.32	-0.20	0.85	笑顔がある*	0.86	0.38	1.35
生きがいである	0.39	-0.15	0.93	言葉でのやり取りがある*	0.86	0.39	1.34
同調しあっている	0.41	-0.05	0.86	喜びがある*	0.89	0.43	1.35
努力しあっている	0.41	-0.02	0.83	感謝しあっている*	0.89	0.47	1.31
成熟している*	0.42	0.03	0.81	真心がある*	0.92	0.47	1.37
寝室を共にしている	0.43	-0.29	1.16	愛がある*	0.93	0.45	1.41
友達のような	0.45	-0.06	0.95	対等である*	0.93	0.49	1.37
永遠である	0.50	-0.04	1.04	明るい*	0.93	0.49	1.38
歩み寄っている*	0.51	0.05	0.98	仲がよい*	0.93	0.46	1.40
たのしみを共有している	0.53	-0.01	1.06	良好である*	0.93	0.45	1.42
目的を共有している*	0.53	0.06	0.99	重要である*	0.93	0.49	1.37
結束がある*	0.54	0.02	1.06	一生続けていたい*	0.93	0.42	1.45
価値観を共有している*	0.57	0.08	1.05	安定している*	0.95	0.51	1.38
気づかいあっている*	0.57	0.12	1.01	支えあっている*	0.95	0.49	1.40
一緒に過ごす時間を持っている*	0.58	0.03	1.13	穏やかである*	1.00	0.54	1.46
尊敬しあっている*	0.58	0.10	1.06	幸せである*	1.00	0.53	1.47
悩みを相談できる*	0.59	0.11	1.08	円満である*	1.00	0.53	1.47
頼りあっている*	0.59	0.13	1.06	優しさがある*	1.03	0.60	1.45
自立しあっている*	0.61	0.18	1.04	自然体である*	1.12	0.75	1.49
理解しあっている*	0.62	0.13	1.11	大切である*	1.12	0.66	1.58
一緒に過ごしている*	0.70	0.16	1.25	自由である*	1.14	0.80	1.47
尊重しあっている*	0.73	0.23	1.22	責任感がある*	1.16	0.83	1.50

注. 平均点以上効果が見られた項目は太字で表記し、アスタリスクをつけた。

Table2 関係認知項目(否定語)の記述統計($n = 84$)

	<i>M</i> 99.9% <i>CI</i>				<i>M</i> 99.9% <i>CI</i>		
		下限	上限			下限	上限
忍耐しあっている	-0.14	0.30	-0.57	不信感がある*	1.00	1.47	0.53
すれ違いがある	0.19	0.69	-0.31	意地悪である*	1.14	1.61	0.66
欠点を指摘しあっている	0.23	0.67	-0.21	悪口を言い合っている*	1.16	1.63	0.70
我慢しあっている	0.30	0.82	-0.23	過干渉である*	1.16	1.56	0.76
妥協しあっている	0.31	0.82	-0.20	傷つけあっている*	1.18	1.59	0.76
邪魔にならないようにしている	0.46	0.94	-0.02	けなしあっている*	1.18	1.64	0.71
多くを求め合っている*	0.47	0.85	0.10	無視しあっている*	1.34	1.82	0.86
不満である	0.50	1.04	-0.04	金銭問題がある*	1.35	1.78	0.92
喧嘩がある	0.50	1.05	-0.05	無責任である*	1.39	1.79	1.00
面倒である	0.53	1.06	-0.01	ののしり合っている*	1.47	1.88	1.07
精神的な距離がある*	0.55	1.10	0.01	束縛しあっている*	1.53	1.82	1.24
情性である*	0.76	1.20	0.32	憎みあっている*	1.54	1.93	1.15
不協和音がある*	0.81	1.31	0.31	ねたみあっている*	1.55	1.88	1.22
相手に無関心である*	0.89	1.36	0.42	異性問題がある*	1.65	2.02	1.28
浪費がある*	0.92	1.45	0.39	暴力がある*	1.77	2.09	1.45

注. 平均点以上効果が見られた項目は太字で表記し、アスタリスクをつけた。

相関分析

肯定項目については、関係認知得点の平均値は $0.65(SD = 0.39)$ 、獲得困難性得点の平均値は $2.91(SD = 0.43)$ だった。一方、否定項目については、関係認知得点の平均値は $0.95(SD = 0.53)$ 、獲得困難性得点の平均値は $3.64(SD = 0.19)$ だった。項目全体では、関係認知得点の平均値は $3.10(SD = 0.88)$ 、獲得困難性得点の平均値は $3.16(SD = 0.51)$ であった。続いて、関係認知得点と評定項目の獲得困難性得点の相関を検討した。肯定項目については、 $r = -.94(n = 58, p < .01; 95\% \text{ CIs } [-.96, -.90])$ と、有意で極めて高い相関係数が得られた。これは、ある評定項目について、その特性を獲得することが困難である程、自身の夫婦に当てはまらないということを意味する。一方、否定項目については、 $r = -.71(n = 30, p < .01; 95\% \text{ CIs } [-.85, -.46])$ と、有意で極めて高い相関係数が得られた。これは、ある評定項目について、その特性を排除することが困難である程、自身の夫婦に当てはまるということを意味する。また、項目全体では、 $r = -.78(n = 88, p < .01; 95\% \text{ CIs } [-.85, -.68])$ と有意で極めて高い相関係数が得られた。この結果から、評定項目が獲得容易である程、平均点以上効果が増大する傾向が示された。

考察

本研究は、中年期における夫婦関係認知に焦点を当てて、平均点以上効果に評定項目の獲得困難性が及ぼす影響について検討を行った。

まず、夫婦関係認知項目を収集し、どのような観点から夫婦関係が認知されているのかを明らかにした。さらに、それらの特性を自身の夫婦関係が獲得するのはどの程度困難あるいは容易なのかが示された。夫婦関係認知がどのような認知次元から成るのかを示した研究はこれまでに見当たらず、重要な知見であると考えられる。

夫婦関係認知の項目の多くにおいては、肯定的な内容および否定的な内容のいずれについても 99% 信頼区間が正の値を取っており、平均点以上効果が認められた。一方、すべての項目において平均点以下効果は認められなかった (Table1, Table2)。これらのことから、人々は自身の夫婦関係を好ましく捉える傾向があることが示唆された。

次に、評定項目の獲得困難性について、先行研究の知見から自己認知においては肯定困難語、肯定容易語、否定困難語、否定容易語の4種類の特性語の存在が示されている (e.g., 工藤, 2004)。しかし、本研究で扱った夫婦関係認知においては、肯定困難語および否定困難語 (獲得困難性得点の理論的平均値が4を上回る項目) は88項目中わずか4項目であった。つまり、多くの夫婦は自身の夫婦関係の特性について、一部を除き、肯定的な内容の特性を獲得すること及び否定的な内容の特性を排除することは容易だと感じる傾向が示された。今後、それぞれの項目について獲得困難性得点がどのような意味を有するのかについて検討することが望まれる。例えば、「趣味が同じである」という項目は獲得困難性得点が理論的平

Table3 関係認知項目の獲得困難性得点

	<i>M</i>	<i>SD</i>		<i>M</i>	<i>SD</i>
責任感がある	2.40	1.25	結束がある	3.11	1.58
安定している	2.42	1.22	努力しあっている	3.13	1.28
自由である	2.42	1.23	価値観を共有している	3.15	1.56
自然体である	2.42	1.43	歩み寄っている	3.18	1.43
一緒に過ごしている	2.43	1.40	行動を共にしている	3.18	1.63
幸せである	2.49	1.47	寝室を共にしている	3.19	2.29
穏やかである	2.50	1.33	友達のようなである	3.20	1.53
大切である	2.56	1.62	暴力がある	3.21	2.64
喜びがある	2.57	1.35	目的を共有している	3.21	1.45
笑顔がある	2.58	1.55	浪費がある	3.35	2.13
支えあっている	2.59	1.30	似たもの同士である	3.37	1.46
優しさがある	2.61	1.45	高めあっている	3.37	1.48
円満である	2.62	1.69	ねたみあっている	3.37	2.31
明るい	2.63	1.58	邪魔にならないようにしている	3.38	1.34
重要である	2.63	1.64	異性問題がある	3.40	2.50
対等である	2.64	1.45	けなしあっている	3.43	2.20
真心がある	2.67	1.48	憎みあっている	3.46	2.36
感謝しあっている	2.67	1.57	無視しあっている	3.48	2.31
許容しあっている	2.68	1.19	悪口を言い合っている	3.49	2.10
会話がある	2.68	1.63	ののしり合っている	3.53	2.27
尊重しあっている	2.70	1.45	束縛しあっている	3.54	2.07
信頼しあっている	2.71	1.47	意地悪である	3.58	1.99
思いやりがある	2.71	1.49	過干渉である	3.58	2.05
仲が好い	2.71	1.65	傷つけあっている	3.61	2.09
良好である	2.71	1.70	金銭問題がある	3.67	2.22
理解しあっている	2.73	1.51	我慢しあっている	3.68	1.84
きずながある	2.76	1.52	すれ違いがある	3.69	1.88
言葉でのやり取りがある	2.77	1.61	面倒である	3.70	1.96
自立しあっている	2.77	1.37	同情がある	3.70	1.80
一生続けていたい	2.77	1.62	忍耐しあっている	3.73	1.76
愛がある	2.82	1.74	不満である	3.75	1.80
愚痴を言える	2.87	1.53	不協和音がある	3.75	1.90
育んできたものである	2.89	1.37	不信感がある	3.76	2.05
頼りあっている	2.92	1.49	情性である	3.77	1.86
気づかいあっている	3.00	1.46	喧嘩がある	3.77	2.20
成熟している	3.01	1.42	無責任である	3.80	2.20
たのしみを共有している	3.01	1.59	多くを求め合っている	3.81	1.82
永遠である	3.01	1.65	相手に無関心である	3.84	1.85
悩みを相談できる	3.01	1.65	妥協しあっている	3.84	1.73
尊敬しあっている	3.02	1.61	精神的な距離がある	3.93	1.92
謙虚である	3.07	1.32	欠点を指摘しあっている	4.05	1.94
同調しあっている	3.07	1.47	性格が一致している	4.06	1.64
一緒に過ごす時間を持っている	3.08	1.77	趣味が同じである	4.29	1.65
生きがいである	3.10	1.53	性行為がある	4.66	1.96

均値の 4 を上回っており、夫婦で一致した趣味を有することが困難であると解釈出来るが、夫婦で趣味が異なることが必ずしも夫婦関係に悪影響を及ぼしているとは限らないと考えられる。

夫婦関係認知における平均点以上効果と評定項目

の獲得困難性の関連について、自己の能力や特性の認知だけでなく、関係認知においても評定項目が獲得容易である程、平均点以上効果が増大する傾向が示された。さらに、平均点以上効果に対する獲得困難性の効果は、肯定項目と否定項目のいずれにも

認められた。これらの結果は Kruger(1999)や工藤(2004)の結果との一貫性が認められ、平均点以上効果を生じさせる獲得困難性の効果はロバストなものであることが示された。

本研究の限界として、質問紙の回収率の低さが挙げられる。本研究の回収率は57.5%であり、十分に高いとは言えず、サンプルが偏っている可能性がある。夫婦関係が良好な場合に回答率が高まっているとすれば、評定項目の獲得困難性得点に偏りが生じている可能性は否定出来ない。しかし、本研究においては、全ての獲得困難性項目の標準偏差を参照し、項目得点において十分な得点の散らばりが得られたと判断した。

最後に、平均点以上効果と評定項目の獲得困難性は、円環的因果律の関係にあると考えられる。つまり、夫婦関係のある性質に関して、自身の夫婦関係に当てはまらないためにその性質を獲得するのは困難だと評しているのか、その性質を獲得するのが困難だから自身の夫婦関係にも当てはまないと評しているのかについては不明である。しかし、臨床的な介入によって評定項目の獲得困難性が変化すれば、それに伴って関係認知も変動すると考えられる。そこで今後の課題として、効果的な臨床的介入の方法について手がかりを得るために、評定項目の獲得困難性が形成されるプロセスを明らかにすることが期待される。

引用文献

- Alicke, M. D., Klotz, M. L., Breitenbecher, D. L., Yurak, T. J., & Vredenburg, D. S. (1995). Personal contact, individuation, and the better-than-average effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 804-825.
- Cohen, J. D., & Fowers, B. J. (2004). Blood, sweat, and tears: Biological ties and self-investment as sources of positive illusions about children and stepchildren. *Journal of Divorce and Remarriage*, **42**, 39-59.
- Endo, Y., Heine, S. J., & Lehman, D. R. (2000). Culture and positive illusions in close relationships: How my relationships are better than yours. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 1571-1586.
- Fowers, B. K., Fisiloglu, H., & Procacci, E. K. (2008). Positive marital illusions and culture: American and Turkish spouses' perceptions of their marriages. *Journal of Social and Personal Relationships*, **25**, 267-285.
- Fowers, B. J., Lyons, E., Montel, K. H., & Shaked, N. 2001 Positive illusions about marriage among married and single individuals. *Journal of Family Psychology*, **15**, 95-109.
- 石川 実(1996). 中年期の発見 井上 俊・上野千鶴子・大沢真幸・見田崇介・吉見俊哉(編) 岩波講座現代社会学第9巻 ライフコースの社会学 岩波書店 pp.95-143.
- Klar, Y. & Giladi, E. E. (1997). No one in my group can be below the group's average: A robust positivity bias in favor of anonymous peers. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 885-901.
- Kruger, J. (1999). Lake Wobegon be gone! The "below-average effect" and the egocentric nature of comparative ability judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 221-232.
- 工藤恵理子(2004). 平均点以上効果が示すものは何か: 評定対象の獲得容易性の効果 社会心理学研究, **19**, 195-208.
- 外山美樹(2002). 大学生の親密な関係性におけるポジティブ・イリュージョン 社会心理学研究, **18**, 51-60.
- 外山美樹・桜井茂男(2000). 自己認知と精神的健康の関係 教育心理学研究, **48**, 451-461.

註

- 1) 本論文は、平成 20 年度修士論文(東京大学大学院教育学研究科)の一部について、データを再分析し、加筆・修正したものである。
- 2) 工藤(2004)においては「獲得容易性」と呼ばれているが、本研究においては項目の得点が大いほどその特性を獲得するのが困難であるということの意味するため、獲得困難性とした。

本研究では関係認知における肯定的な性質と否定的な性質の双方を取り上げるため、評定項目の獲得困難性が意味するところは、厳密には、肯定的な性質の獲得の困難性と否定的な性質の排除の困難性の 2 種類となる。が、記述の簡潔化のため、本論文においてはこれらをまとめて獲得困難性と記述する。

Correlation between the above-average effect and effect of ease/difficulty of acquiring traits in the cognition of marital relationships

Sho YABUGAKI (*Graduate School of Education, The University of Tokyo*)

A considerable amount of studies have been conducted on above-average effect on the abilities or traits of self, and these researches show whether the above-average effect is occurred or not depends on the effect of ease/difficulty of acquiring abilities or traits. This study was conducted to examine whether the same mechanism can apply to relational traits and both positive and negative traits. The results revealed that the occurrence of above/below-average effects were dependent on the effect of ease/difficulty of acquiring traits. In addition, this finding suggests that the above-average effect is robust phenomenon. The results are discussed in terms of research methods of positive illusions.

Keywords: positive illusions, above-average effect, marital relationships, middle years, ease/difficulty of acquiring traits.